

第4回VVN研修会 報告書

日時 2003年2月16日(日) 10:30~12:00
場所 泉中央 セルバ 5Fセルバホール
講師 河北新報報道部 スポーツ班
大江 秀則 さん
受講者 33名

内容 「スポーツ新世紀~ベガルタをとりまく環境」
現在大江さんは河北新報に「スポーツ新世紀」を連載中で、新しいスポーツの流れ・変化をさまざまな視点で、報告しています。その取材の最前線で活躍している大江さんに、チームのための役立つお話を聞きました。



【スポーツの報道の仕方を変えたい】

おはようございます。大江と申します。

まず河北新報のスポーツ班の紹介をします。15年前は4人だったはずですが、現在では9人います。その9人の中でそれぞれ受け持ちが決まっています、ベガルタ仙台で言えば、J2(ブランメル)から担当記者は1人でした。その記者が、ホームからアウェイまで年間44試合全て担当していたのです。昨年J1に昇格して、我々もJ1への対応が求められ、読者からのニーズも多くなりました。きちんと取材している記者として認知されるようになると、1人では無理な部分も出てきます。J1の開幕時には、確かキャンプからだと思いますが、3人で取材に行きました。リーグ戦からナビスコカップ前までをカバーして、ホームの場合は、7~8人遊軍の記者を投入しました。それでも足りない時もあり、今年も同様に取材体制で報道していこうと思っています。

2年前、みやぎ国体、障害者スポーツ大会がありました。その頃は塩竈支局の記者でした。4月の転勤のときに(入社後15年間、スポーツの取材にあたったことがなかったのに)編集局の幹部から、国体、ワールドカップをやれ、と言われました。ブランメルもベガルタもライブでは1試合も見たことはなかったし、宮城球場の野球も見たことがありませんでした。それまでは、事件事故の記者、いわゆる事件記者でした。(そんな私に)スポーツを取材しろ、というのは、なぜですか?と上司に問いました。基本的には専門記者を育てない、という会社なのですが、それでもスポーツをやっている記者は選手の顔、用語も正確に書くという専門性が求められている中で、私にやれという理由を聞いたのです。その答えは、スポーツの報道の仕方を変えたい、ということでした。新聞のスポーツ面では、基本的には選手が主役で、なぜ勝ったか、なぜ負けたか、というのを取材してニュースとして提供するものです。これが今までのスポーツ報道の全てでした。勝因とか監督や選手がどう見ているかというのは読者の知りたいこととして普遍のものです。私に求められたのはそれ以外でした。「どうせやったことはないのだから、私が知らないのは当然だ」という感覚でスポーツを見られる。知らないという面からスポーツを見てくれ、ということでした。

【スポーツは楽しいもの】

新聞記者は横書きのものを縦書きにするようなもの。そこで「どうしてスポーツをするの」という原点に戻ることになりました。ある大学の先生には、やっていることの動機はひとつ。それは楽しいからでしょう、とお聞きしました。もちろんプロは勝利とのバランスの問題がありますが、楽しいと思えるのが本当のスポーツ。スポーツをやって楽しかった、というものをテーマにしたらどうだ、というアドバイスを貰いました。それが「スポーツ新世紀」の始まりです。対象は選手だけではなく、身体を動かす、プレーするというスポーツ。スポーツの楽しみ方として、見るというのも楽しみ方。プレーと見るというのはスポーツという楽しみ方では同じレベルだと思います。ここで皆さんがやっている、ささえる、というスポーツの楽しみ方もある。大きく分けると3つの楽しみ方を基本にシリーズをやっていこう、ということで、2001年の8月にスタートさせました。大きい展開としては、2つにしました。1つは楽しみ方の切り口を分けて展開していく。1つは地域に分けてどうやっているかをポイントとしました。地域の方は、スポーツの町、というタイトルで5.6回やっていると思います。迫町、柴田町、しばらくやって、国体後、仙台もやりましたし、山形県の川西、秋田の能代、山本地方などを取り上げ、今月末には福島県の楡葉町をテーマとし、「Jビレッジ」という施設を通じた地域を見ていこうということにしています。

もう一つの方はテーマ設定での楽しみ方。10パターンくらいの関わり方に分かれました。スポーツビジネスのときもありました。サッカーのJリーグの中継だと、自分で試合予想しながら、BSデジタルの双方向の機能を使って、試合展開の予想を入力したりもしました。さらに、それぞれ切り口の、10回うちの1つを奥深くやろうというもの。それが「スポーツ新世紀」のシリーズになったわけです。

【企業スポーツの変化】

最初にやったのは企業スポーツというものでした。国体もそうですが、日本のスポーツの展開を見ると、まずは明治時代の学校体育が軸になっています。戦前までは学校というのが日本のスポーツの主軸になっていたのです。全国高校野球とか早慶戦とか、学校がスポーツの現場の中心になっていました。戦後せりだしてきたのが企業スポーツ。戦後復興の中で日本の企業もスポーツの見方が変わってきたのです。スポーツを宣伝部門として大きく位置づけました。学校を卒業すると仕事を優先するのでスポーツする機会がなくなります。その中で世界的な競技者を育てようというお手伝いをするもの。企業が大学を出た選手たちに機会を与えようとした50年だったと思います。ところが、バブルが崩壊して真っ先に切られたのがスポーツだったのです。当然スポーツ部門を持てるのは大きい企業なのですが、東北電力は東北6県+新潟にあるので、特定の地域に、というのを嫌がる企業なので、企業スポーツの部についても、例えばラグビーであれば秋田にチームがある、バドミントンが新潟とかバランスをとっておいていました。現在は東北電力自体がやっているところはなくなりクラブチームになりました。宮城には女子のバスケットを置いていましたが、すでに廃止になっています。NTT東日本宮城もバドミントンなどが昨年3月休部になりました。バレーは休部とともにチーム自体がなくなってしまいました。バドミントンはクラブとして選手、監督ともに残っています。以前はそれなりの待遇や環境整備がりましたが、クラブ化になったあとは普通に働いています。そして週末や夜間を使って練習しているのです。また、現在も男子は日本リーグ1部に残っています。

企業スポーツの中で何が起きているかを今年1つのテーマでやった中でユニークだったのは、新日鐵釜石でした。これは一つの指針ではないかと思えます。日本選手権から7連覇という状況から徐々に落ちていき、新日鐵も企業スポーツを見直し100%出資してかかえることはやめています。バレーボールもそうでした。以前モントリオール五輪の時などでは100%出資してかかえていました。現在ではチームはありますが、堺ブレーザーズというクラブチームになっています。

【シーウェーブの示すもの】

同様に新日鐵釜石もクラブ化しました。クラブ化したときに新日鐵釜石はサポーターを集めるということをしてしました。チームがある地域と一体でサポートしようとしたのです。サポーターは金銭面でのサポーターで加入してお金を払います。お金を払うが見返りは会報やチケットが1試合分貰える程度、お金6000円に見合っているかというところでもありません。自分たちにとって新日鐵釜石は地域の誇りだった。なくなるのは寂しいからお金を出す、というものでした。ヨーロッパのサッカークラブはもともとそういう経営であって、釜石はそれを目指すということですが、それでも年間の経費のうち5000万円は新日鐵が払っています。1年目は報道もありましたし、市民にも危機感があって3300人の個人サポーターが集まりました(2年前)。昨年はどうだったかという、サポーターの数が2800人に減ってしまいました。3300人のうち継続会員は1800人でした。クラブ側から言うと営業努力不足だったといえます。立ち上げのときは一生懸命選手たちも同様に街頭に立って休日を使ってシーウェーブを応援してくださいとやりました。しかし、この調子なら大丈夫と考え2年目は選手たちはもういいよ、あとは増やすだけだから、事務方だけでやるから、と言ったとのこと。ところが逆に700人も減ってしまった。更新の手続きもしてくれなかったということです。最も端的に言えば、営業努力として選手がでなかったから、でしょうか。私にはそうは思えません。本当にチームのことを考えたら誰が立っていてもそれが700人減る理由にはならないのではと思います。(本当の会員減少の理由は)クラブというのが市民に理解してもらえなかったということなのでしょう。自分たちがやらなくてもチームがなくなるのでは、という安心感が出てしまったのでは、と思いました。サポーターの内訳は、3300人のうち岩手県の方は半分の1500人。全国からのファンが多く、県外から1800人を占めています。2年目どう動いたかをみたら、なんと岩手の方が半減していたのです。本当に釜石を応援してやろうと岩手の外から入ってくれた人、見返りというのはないはず、と思っていた人は、2年目も継続したのです。この事実は重いと思えます。

【学校スポーツの変化】

東北を舞台にした企業スポーツの後は、学校のスポーツにしました。学校のスポーツは変わってきている、というものです。体育の時間が苦痛な子供が多い、といえます。なぜなのでしょう、それは身体を動かしてスポーツが楽しくない、それが評価となり成績に結びつくからです。小学校はスポーツの入口だと思えます。郡部で育っている場合学校に入って初めてスポーツとは楽しいな、と思うはずなんです。単純に楽しいという視点では入れなくなってきているようです。

普通、部活動は勝利至上主義。例えば中体連で勝つというのが、ピラミッド形式のシステムができあがっていて、大会のために練習して、引退の時期は3年生は大会後引退してしまいます。夏の中体連、6.7月で引退してしまうのです。14歳にしても引退。卒業式寸前までスポーツをしていてもいいのではない、スポーツを楽しむための環境ではだめなのか、これはおかしいのではないかと先生に聞いてみましたが、受け入れられませんでした。次の年がありますからと言うのです。大会に追われた2年生の指導に関心がいつてしまう。では子供たちはどうなのでしょう。なぜスパッとやめてしまうのでしょうか。

その中で面白かったのは、宮城野高校の取り組みです。取材対象として宮城野高校は高校体育連盟に入っていない。宮城県内の全ての高校が加盟しているのは、加盟していないと大会には出られないからなのです。ただ、宮城野高校も部活動はやっていますが、大会に出ることが目的ではないのです。サッカーが好きだから、野球がやりたいから、とそういう動機でやっている。3年生でももしかしたら大学入試も終わってからもやっているのかもしれない。そういう部活があってもいいじゃないか、勝ち負け以外のスポーツの楽しさというのが必要ではないかと思えます。

【スポーツを楽しむ場】

ワールドカップというイベントが終わって、宮城スタジアムっていうのはどうかな、と思っています。(極論を言えば)宮城スタジアムは壊した方がいいと私も思っています。宮スタでは何が起るかわからないから、宮スタで取材やる度に20人を毎回使っています。そして必ず、またもアクセス問題。人を出した以上紙面にさかないと、おまえのところで埋めてくれ、と言われるから。

スポーツ空間論。スポーツをする場、として考えると、究極は宮城スタジアムでした。楽しむスポーツというのは、もはや場がなくてはいけないのかな、と思いました。昔はグラウンドがなくてもスポーツはできました。公園にいかななくても、学校にいかななくても、生活環境の中でスポーツの場があったのです。今は道路でやっているから公園いけと言われる。公園に行くとも遊具があったりしてサッカーできない。今はスポーツをやるぞ、とそれなりの場所に行かないとダメなんです。

仙台にある400以上の都市公園の中でどうなっているか、まちづくりの中でスポーツという発想はどうだろうと考えました。仙台北部では、デベロッパーが行政に寄附する形で公園区画があって、公園の代わり

にフットサル場をつくるという団地も出てきました。秋田はすごいところで、バスケットは能代工業が有名ですが、全ての公園にバスケットのゴールが置いてあるのだそうです。

宮スタのようなところで、うまくやっているところはないかと思い、大分に代わりの記者を行かせました。なぜなら、不便なところでやっているのは同じですから。横浜などは最寄り駅から近いのですが、宮城スタジアムの場合、利府駅是最寄り駅とは言わないでしょう。徒歩1時間なんて普通書きませんね。そういう状況で大分も同じだろうと思ったので選びました。が、ビッグアイにはレストランがあって、窓際の席はピッチが見えるそうです。ベガルタ仙台 - 大分トリニータ戦のときにぜひ行きたいと思います。食事しながら見ているサポーターもいるそうです。ベガルタ仙台の試合のときには仙台スタジアムは一杯になりますが、その他のときにはほとんどいません。アメフトの試合のときは有料入場者数50人。それが普通のスタジアムなのです。大分が偉いなと思ったのは、レストランを作って試合のないときも営業しているのです。今後も営業を続けると。それはなぜか、というと、ピッチで何もないうちも人が集まる仕掛けができています。トレーニング施設も作るときの視点が違って、はじめから一般向けに作っています。宮城スタジアムって必要だね、と住民が気軽に使えるもの。SMA Pのコンサートではなく、スポーツイベントをやって欲しいと思います。

【ボランティアサポーター論】

来週から始まるのがボランティアサポーター論。これが難しいテーマです。

プレーする以外のスポーツの関わり方として、みやぎ国体を取材しました。それまでのボランティアは福祉的なイメージがあり、私の固定観念を壊してくれたのがみやぎ国体のボランティアでした。最後までわからなかったのが、ボランティアは何人だったかということ。国体本部、地域ごとのボランティアは大体把握できました。直接に関わったのは6万人くらいです。プランターの花作りを始める、というので、老人クラブを取材しました。学校にも行って、植物の植え方とか育て方とか、おじいちゃんとかおばあちゃんが教えました。その結果小学生1年生から老人クラブのお年寄りまでで花を一杯にしました。みやぎ国体は、登録している6万人のボランティアだけでは、到底なしえなかったのではないかと、思いました。自分としては20万人くらいは関わったのではないかと、見ています。それくらい多くの方々に関わったのがスポーツの楽しみということに尽きるのではないのでしょうか。

加えて、ボランティアのサポートの仕方というのがあるのでは、と思います。その中で、選手もボランティアなんだよ、という視点があります。ヨーロッパの社会だと、トップレベルの選手はリタイアすると地域の中に戻って行って、指導者としてのボランティアをするのが普通です。日本の場合は、それがなくて、チームの監督などをやらないと経験を生かせない。日本の中でもトップレベルを経験した人あるいは現役選手の中でも、教えるという人がやっとな出てきています。

福島県の富岡町では、スポラというスポーツボランティア団体があります。特定の種目を応援する団体ではなく、生涯スポーツをやるイベントであれば何でも応援するという団体です。新しいスポーツを起こそうという人たちの動きとしては、北海道で始まった雪合戦。ちょっとしたルールを設けてスポーツにしたのです。青森で雪合戦をスポーツとして定着させようとやっている人たちもいます。

皆さんもベガルタ仙台のボランティアで、チームに近いのでは、と思います。ボランティアを受ける側に非常に言いたいことは、日本ではボランティアを、無償のお手伝い(専門の警備員を雇うと金がかかるけどボランティアはタダ)だと思っている主催者が今だにいる、ということです。今回の取材を通して強く感じました。ボランティアはもっと力を持つべきです。極端に言えば、ボランティアがいなければ、ベガルタ仙台は試合ができますか。仮にボイコットでもしてみたらどうでしょうか(笑)。ハンドレッドに限らず、他のJのクラブも大差はないでしょう。海外との違いは何か。ボランティアへの感謝の仕方が違う。名門クラブでクラブ創設からきちんとしてきたところでは、ボランティアは経費的には助かっているのは確かですが、皆さんがいるからゲームができる、ときちんと認識しています。クラブとボランティアが対等です。当然チームはボランティアに何をしてもらいたいか、を明確にしています、それに対し日本のボランティアは受け身になりすぎているのではないかと、思います。海外のボランティアは、自分たちの仕事に責任を持っている。完全にボランティアの方々には責任をもたされている。日本の場合はお手伝いという域を出ない。システムとして主催者側への遠慮があるのかな、と思いますが、ボランティア側がこうやればもっと提案してもいいのではとも思っています。それが1点。ベガルタ仙台のボランティアの問題で言えば、仙台スタジアムで見ていて感じるの、会社側とボランティア側の連絡はどうなっているのかな、といつも疑問に思っています。観客から見れば、揃いのコートを着ている人を見れば、誰がハンドレッドか誰がボランティアかわからない。完全にスタッフの一員なんだという自覚をもっていないと、何か判断をしなければならぬときに大変だろうと思います。観客は主催者側の一員だと見ているわけですから、それなりの対応をしないとイケない。運営者側と協議して責任を持たせてもらわないといけません。そうしないとお手伝いから抜け出せないのではないかと、ということです。

(文責・小野枝美子)